

一級河川恩智川治水緑地

平成 22 年 2 月 20 日（土）

池島・福万寺遺跡Ⅱ（その 10－1） 発掘調査 現地公開資料

財団法人 大阪府文化財センター
調査グループ 池島支所

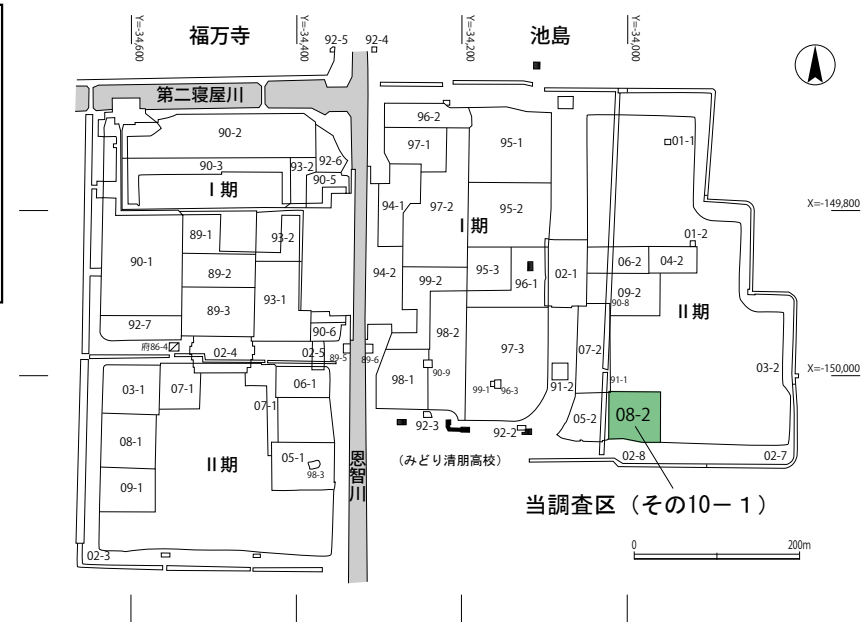


図 1 池島・福万寺遺跡 調査区位置図



図 2 池島・福万寺遺跡（池島地区）の弥生時代中期の様相

【池島・福万寺遺跡Ⅱ（その 10－1）】

所在地 東大阪市池島町 5 丁目他

最終調査面積：3666 m²

事業契約期間：平成 20 年 9 月 1 日～平成 22 年 9 月 30 日

調査担当 調査グループ 池島支所

委託機関 大阪府寝屋川水系改修工営所

遺跡の種類 生産域・集落

遺跡の時期 縄文時代～近世

【これまでの調査】

池島・福万寺遺跡は、東大阪市と八尾市にまたがって位置しており、八尾市側を福万寺地区、東大阪市側を池島地区と称し、さらに調査時期から池島Ⅰ地区・池島Ⅱ期地区、福万寺Ⅰ期地区・福万寺Ⅱ期地区の計 4 地区に分けています。現在までに約 20 ヘクタールの面積を調査しています。当調査区の所在する池島Ⅱ期地区は平成 13 年から発掘調査を開始しており、弥生時代から古墳時代の集落跡や水田跡、縄文時代の終わりから弥生時代初め頃の墓域などを調査してきました。縄文時代から近世の土器類のほか、古墳時代の小形鏡や弥生時代の青銅器の鋳型なども出土しています。

【池島・福万寺遺跡の弥生時代の水田】

当遺跡では、近畿地方に水田稲作がもたらされた弥生時代はじめから現代に至る各時代の水田が見つっています。約 2500 年にわたる水田の移り変わりが、広範囲で明らかになりつつあります。

当遺跡の弥生時代の水田は、前期（紀元前 4 世紀頃）から後期（紀元後 1～2 世紀頃）の各時期の例が見つっています。水田の上を洪水によってもたらされた土砂が覆っていたため、畦畔（あぜ）や水路、水口（みなくち）、堰（せき）などが良好に残っていました。水田 1 枚の面積は 10～20 m²前後のものが多く、現代の水田に比べかなり小さいため、「小区画水田」と呼んでいます。

【当調査区のこれまでの調査状況】

当調査区は池島Ⅱ期地区の南東部に位置し、平成 20 年 10 月から調査を開始しました。これまでに鎌倉時代～江戸時代の条里坪境、水田畦畔、島畠などを確認し、古代（奈良～平安時代）に施行された条里型地割に基づく耕作地の移り変わりが明らかになりました。

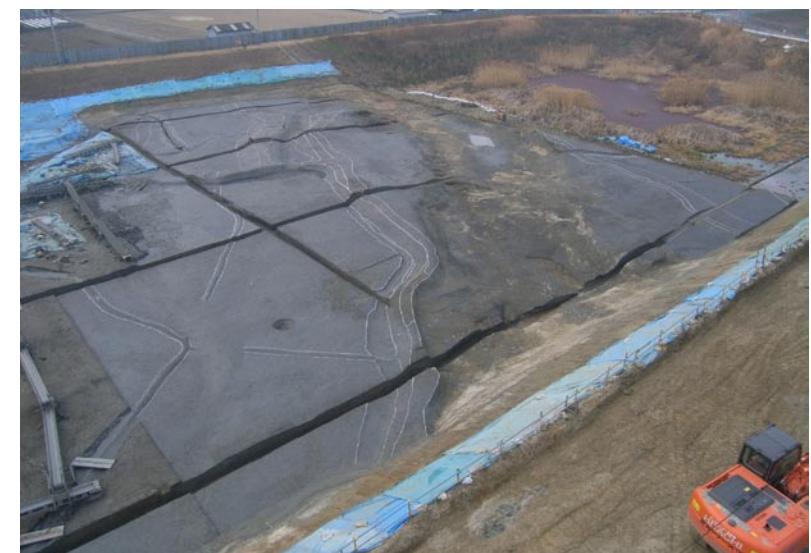
古墳時代～弥生時代後期の遺構面では、調査区北東部の地形の高い部分（微高地）で、集落を確認しました。6 棟の掘立柱建物跡を含む、多数の柱跡（ピット）、穴（土坑）、井戸が見つかり、また多くの遺物が出土しました。さらにはヒスイ製の勾玉、有孔円板などの滑石製品、朝鮮半島でつくられたと考えられる陶質土器も出土しています。また、集落周辺の低地部分では、水田を検出しました。

【現在の調査状況】（裏面の図 3）

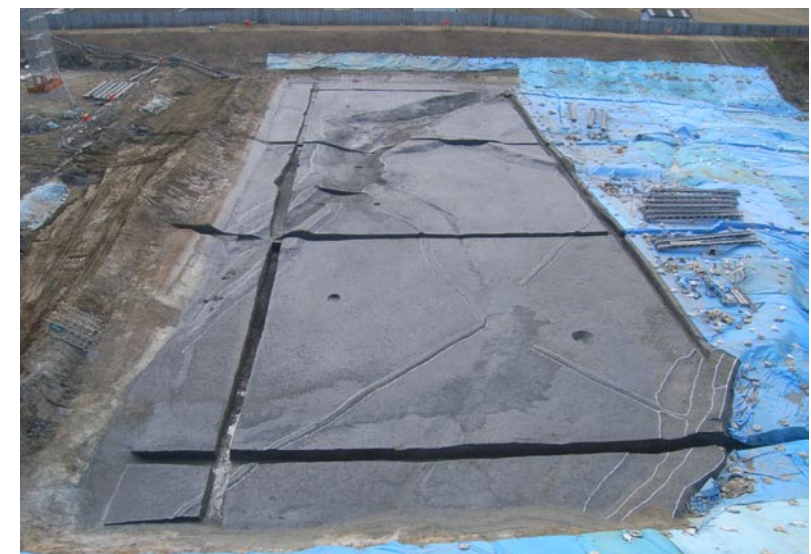
現在は弥生時代中期後半の遺構面を調査しています。地形は、調査区の南東部が最も高く（標高 3～2.8 m）、北に向かって徐々に下がっています（標高 2.5 m 前後）。

調査区の西側では、幅約 20 m、深さ約 1.5 m の 6 4 6 流路（川）が流れていました。この流路の東側では、水田の存在を示す畦畔、溝、水口が見つかりました。また、流路底では杭を打ち込んで造られた堰が見つかりました。さらに調査区の東側でも 6 6 5 流路が見つかり、やはり底で堰が見つかりました。これら遺構の配置から、水田は主にこの 2 つの流路を取水源とし、南側の高い箇所から、北側のより低い水田域へと水が送られていたと考えられます。

池島Ⅰ期地区の同時期の水田においても、こうした堰や水口、給水・排水のための水路が見つっています。これらが地形に合わせて配置されており、当遺跡のこの時期は弥生時代の水田稲作技術の画期とされています。



調査区西半（北東から）

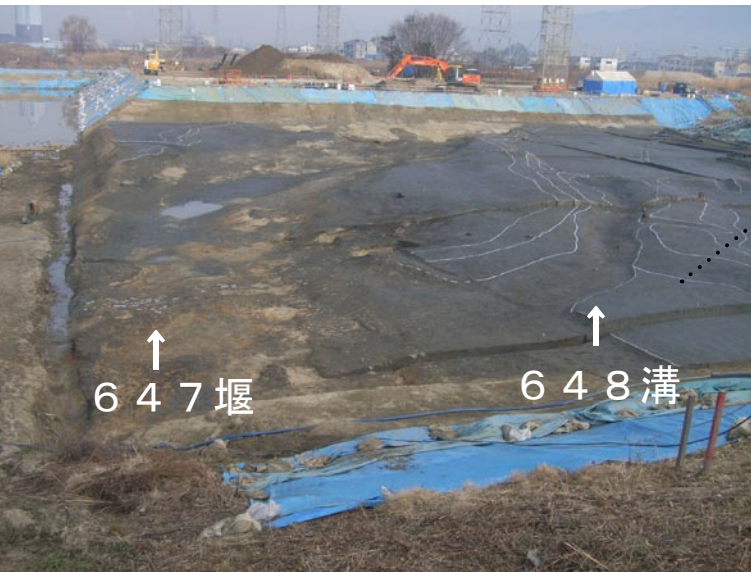


調査区東半（北から）



水田

水田は、高さ約10cm、幅約40cmの畦畔（あぜ）によって区切られていました。畦畔が、流路の方向や地形の高低に合わせてたくみに配置されている様子がうかがえます。



647堰と648溝

646流路の底で、杭を多数打ち込んで造られた堰（せき）が見つかりました。その位置から、北側の水田に水を送るよう掘られた648溝に水を取り込むために築かれたと考えられます。

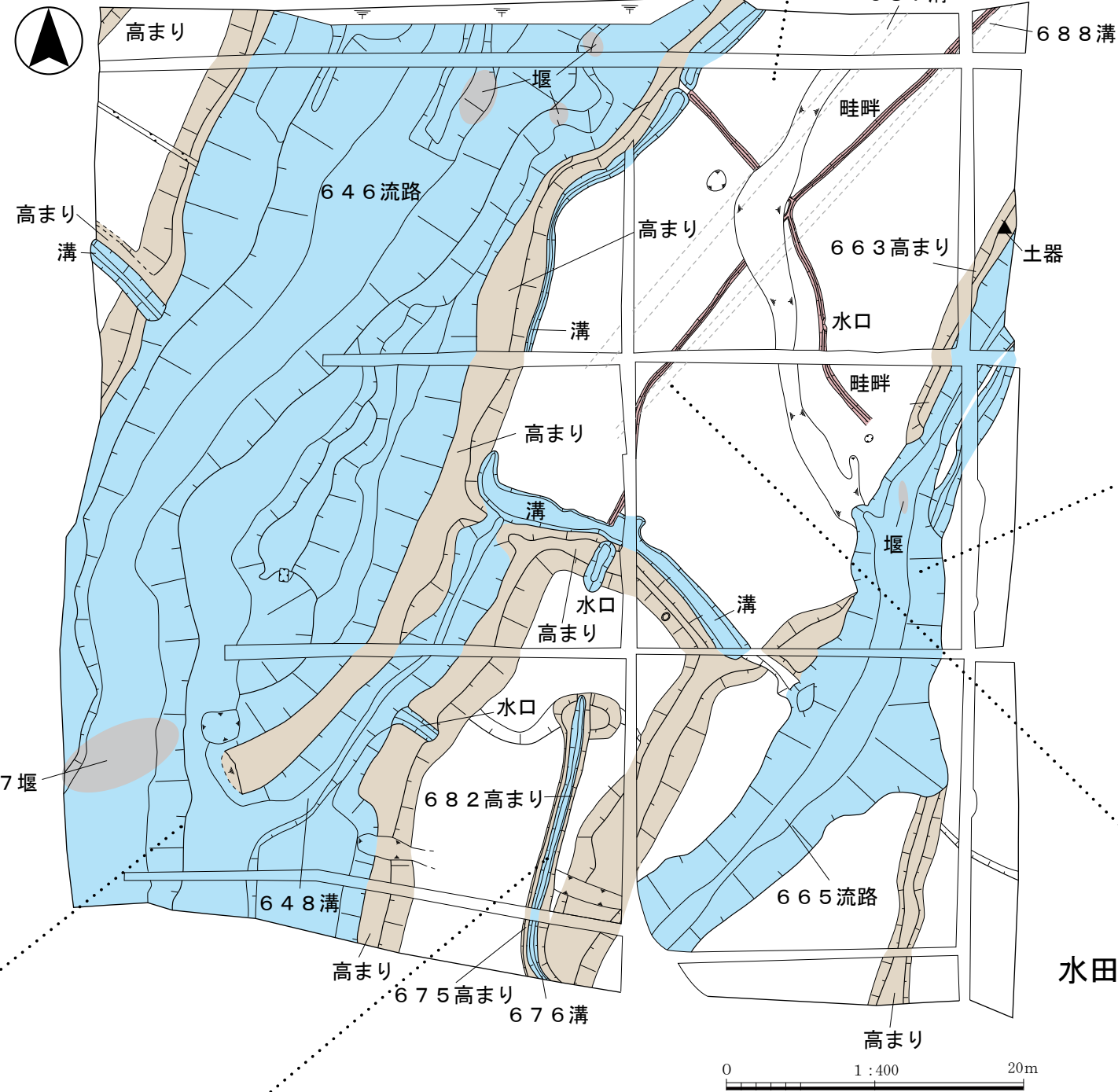


図3 第13面 平面图



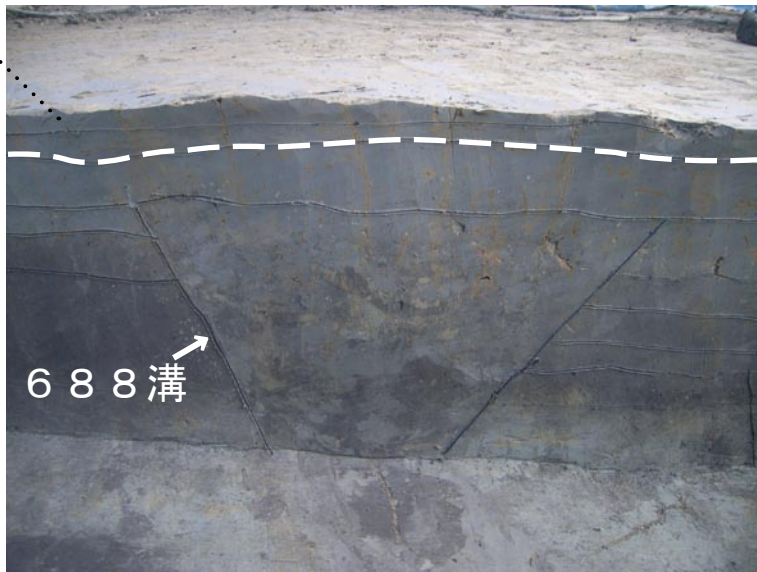
676溝と高まり

676溝は、両側に高まりを持ち、幅0.3m・深さ0.2～0.3mを測ります。648溝に比べ幅が狭く、東側の665流路から取水していたと考えられます。



665流路

調査区東側を南西から北東に向かって流れていたと考えられる流路です。底部には堰が築かれており、646流路と同様に北側の水田の取水源となっていたと考えられます。



688溝

水田層の下で見つかった溝です。断面形がV字状で、埋まっていた土の様子から掘ってすぐに埋められたと考えられます。水田を造成する際に水抜きのために掘られたのかもしれません。